The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	R.M.BallantyneのThe Coral IslandとR.L.StevensonのThe Ebb-Tideに見る“roving”な主人公たちについて
Author(s)	乙黒, 麻記子
Citation	Osaka Literary Review. 2017, 55, p. 1-19
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/60624
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

R. M. Ballantyne の *The Coral Island* と R. L. Stevenson の *The Ebb-Tide* に見る “roving” な主人公たちについて

乙黒麻記子

1. はじめに

スコットランド人作家 R. M. Ballantyne の代表作 *The Coral Island*（1858、以下 *CI*）は、R. L. Stevenson の *Treasure Island*（1883、以下 *TI*）に多大な影響を与えた海洋冒険小説の古典とされているが、Ballantyne 自身も、Stevenson と伝記的に多少の接点があることもあって、Stevenson の「文学的な父親（“literary father-figure”）」（Jolly, “*The Ebb-Tide*” 88）とされることが多い[1]。

CI を実際に一読すると、*TI* よりも寧ろ、Stevenson と義理の息子 Lloyd Osbourne の共作とされる中編 *The Ebb-Tide*（1894、以下 *ET*）こそが *CI* の「書き直し」と分かるのだが、私が調べた限り、この点を指摘するのは Roslyn Jolly が *Scottish Studies Review* で発表した論文のみだった。少し長くなるが、Stevenson の南海物研究の諸問題が端的に表されているので、Jolly の論文冒頭を引用する：

> Critics have placed R.L. Stevenson’s *The Ebb-Tide* within a rich literary genealogy, stretching back to *Robinson Crusoe*, *The Tempest* and ‘The Pardoner’s Tale’, and forward to *The Island of Doctor Moreau*, *Victory*, and ‘The Hollow Men’. I suggest that a close, and overlooked, literary ancestor for *The Ebb-Tide* is R.M. Ballantyne’s Pacific adventure story, *The Coral Island* (1858). Sixty years before William Golding’s famous rewriting of the same work as *Lord of the Flies* (1954),

Stevenson reworked Ballantyne's classic boys' book in his narrative of failed adventure and existential unease. The transformation of *The Coral Island* into *The Ebb-Tide* is a postcolonial 'writing back', which marks Stevenson's rejection of the colonialist fantasies of his childhood reading and the apogee of his fictional critique of imperialism. It is also a stylistic experiment in combining the thematics of adventure with realist and symbolist modes of writing, which represents an important development in the emergence of British modernist literature.（79、以下強調は全て筆者）

CI から *ET* への影響が見過ごされてきたのは、どちらの作家も死後、英文学史の本流からは除外されてきたためだろう。Stevenson の場合、スコットランド文学形成の動きや南太平洋島嶼部の文学運動など、様々な要因で近年は再評価が進んでいるとはいえ、*ET* を含め最晩年の南海物は比較的研究が少ない。Ballantyne に至っては、彼の作品のみを扱った研究はほとんどない状況で、Jolly も *ET* と *CI* のキャラクターやプロットの共通項を詳細に分析はしているが、その他の Ballantyne 作品には全く言及していない。

Stevenson 研究の暗黙の了解は、死後数十年続いた英文学史における不遇の払拭にある。中には、あの手この手で「作家の偉大さ」を証明しようとするものもあるのだが、この傾向は晩年の南海物研究でより顕著となる。例えば、生前に発表された最後の作品である *ET* は Stevenson の芸術的到達点とされ、先の Jolly の引用にあるように「モダニズムの先駆け」との評価を受けている。一方で、作家としての原点と規定される Ballantyne は極端に単純化される。本稿は、*CI* と *ET* を比較する Jolly の分析と主張に基本的に同意するが、どちらかと言うと、Stevenson 再評価のための踏み台にされてしまった感のある Ballantyne をもう少し丁寧に読み解きたい（そして、この論文ではそこまで論じることができないが、究極的に

は南海物の系譜の中で二人の作家の位置づけを考えたい)。その際に鍵となるのが、Jolly は全く触れていないが、Ballantyne による *CI* の正当な続編 *The Gorilla Hunters*（1861、以下 *GH*）である。

以下では、*CI* と *GH* の語り手 Ralph Rover と *ET* の主人公 Robert Herrick が道徳的に葛藤する様を見比べながら、Jolly の言う「失敗した冒険」や「実存主義的な不安」といった要素が、すでに Ballantyne 作品に見られることを明らかにしたい。

2. 作品概要

まずは *CI* と *ET* の概要を見ていきたい。*CI* は、勇敢で聡明なリーダー気質の Jack (18 歳前後)、思慮深い語り手 Ralph Rover (Rover はあだ名、15 歳前後)、悪戯好きで小柄な Peterkin（14 歳前後）ら三少年が、乗り込んでいた商船が嵐で沈没し、南海の無人島に流れ着くことでスタートする（他の乗組員らは救命ボートに乗って流されていくが詳細は不明)。物語の前半はロビンソン物の伝統を色濃く反映した無人島でのサバイバルが描かれる。三人は国王 (Jack)、大臣 (Ralph)、道化・臣民 (Peterkin)（16; ch. 3）と称して、無人島に新しい国家を築く「ごっこ遊び」を宣言し、少ない道具と本で身に着けた知識を活用しながら、南の島の楽園生活を満喫しつつ、養殖池を作ったり、ボートを作ったりと、勤勉な生活を送る。絶海の孤島に取り残されるという危機的状況にも関わらず、“we'll build a charming villa, and plant a lovely garden round it, stuck all full of the most splendiferous tropical flowers, and we'll farm the land, plant, sow, reap, eat, sleep, and be merry”(17; ch. 3）という Peterkin の台詞にあるように、彼らは極めて楽観的である。執筆当時に想定された少年読者は、作品を通じて実用的な知識や、服従と勤勉、信仰の重要性などを学びつつ、「帝国の建設者」[2] として教化される仕組みとなっており、その意味で、*CI* は ‘conduct book’ としての性格を色濃く残している。

しかし、物語の後半にかけては、人食いの原住民の襲来（ch. 19-20）、海賊による Ralph の誘拐、海賊と原住民の間の死闘（ch. 21-28）、Ralph のサンゴ島への帰還の後、サモア人の少女 Avatea を生贄の儀式から救出を試みるが失敗し、三人とも数か月間にわたって原住民に監禁される（ch. 29-35）など、幾分陰鬱で紋切り型なエピソードが次々に展開される。最終的には、彼らは名もない白人宣教師に唐突に救出され、未開の地へのキリスト教伝道の必要性が強調されて物語は終わる。なお、Ballantyne は実際に南太平洋に行った経験はなく、*CI* は宣教師らの手記や、航海記などの様々な文献を下敷きにしていると作者自らが認めており[3]、後半部はそうした南海言説の寄せ集めといった感は否めない。

ヴィクトリア朝中期に書かれた *CI* に対して、大英帝国も斜陽に差し掛かる世紀末に書かれた *ET* は、同じように南太平洋の海と島々を舞台とするものの、陰鬱なイメージばかりが強調される。ここでは、白人がもたらした感染症（インフルエンザや麻疹、天然痘など）に苦しむ住民たち（7-8; ch. 1, 73-4; ch. 7）と、あらゆる階級のヨーロッパ人種が富と快楽を求めて集まる姿が描かれ、中でも主人公たち三人は最下層の落伍者として紹介される[4]。

物語の主な視点として *CI* の Ralph に相当するのは、オックスフォード大学出身だが、どんな職についても上手くいかない文学青年 Robert Herrick、Jack に相当するのは飲酒癖のために船と家族を失ったアメリカ人船長の Davis、そして Peterkin に相当するのは、醜い容姿と粗野な性質が強調されるが度胸だけはある、ロンドン出身の元店員 Huish である。

三人はタヒチのパペーテの留置所跡に住み着いた浮浪者で、浮浪の罪で捕まる寸前のところを、乗組員が天然痘で死んだばかりの船 Farallone 号で積荷のシャンパンをシドニーに届けるという仕事を得る。Davis は積荷ごと船を南米で売ろうと企むが、航海中に、積荷の大部分がシャンパンではなく水の入ったボトルで、船にもおそらく重大な欠陥があり、沈没を狙っ

た保険金詐欺に巻き込まれていることが発覚する。彼らは強制送還されようと合衆国領事がいる近くの港を目指すが、無計画に暴飲暴食して航路を見失っていたDavisのために食料不足に陥り、地図に無い珊瑚島を発見して上陸する。そこはAttwaterというイギリス人紳士が支配する島で、彼は原住民を奴隷として採取した大量の真珠を蓄えており、DavisとHuishは彼を殺害して真珠を奪おうと画策するが、返り討ちにあう。結果的に、HuishはAttwaterに撃ち殺され、Davisは「改心」して「神」とAttwaterの下僕となって島に残り、Herrickのみが脱出しうることが示唆されて終わる。

3. 先行研究

*CI*は、当時広く読まれていた'penny dreadful'と称される不道徳で通俗的な読み物に対抗すべく、少年読者向けに道徳的に安全な娯楽として書かれたもので、南海の楽園言説とロビンソン変形譚を巧みに組み合わせ、少年向け冒険小説の典型となった（Brantlinger and Thesisng 5-6）。*CI*からの影響が顕著な作品としては、*TI*以外にも、J. M. Barrieの*Peter and Wendy*（1911）、W. Goldingの*Lord of the Flies*（1954）などが挙げられるが、後の作家たちは*CI*の教訓主義に反発しているとされる（Hannabuss 33）。また、Susan Naramore Maherは、Ballantyneは少年読者の道徳的教育のためにロビンソン変形譚を形骸化してしていると批判する（174）。*CI*、およびBallantyneを真っ向から論じた研究は少なく、単独の書籍としてはErick Quayleによる伝記が一つある程度で、その他、ロビンソン変形譚の一つとして読み解くMartin Green、近年では珊瑚と帝国拡大のイメージ、少年たちの役割について論じたMichelle Elleraysの研究などがある。日本語の文献としては、水間千恵や岩尾龍太郎が、児童文学やロビンソン変形譚の観点から論じている。

一方、Stevensonの南海物についての重要な研究としては、Jollyの諸

研究に加えて、南海物というジャンルにおける Stevenson の位置づけを考察する Vanessa Smith、Stevenson の宗教観や宣教師らとの関係といった史実的側面を詳しく紹介・分析する Ann C. Colley、最晩年の Stevenson を Joseph Conrad と比較しながらモダニズム作家として評価しようとする Alan Sandison などがある。他に *ET* を中心に論じているものとしては、受動的な Herrick と、父的存在である Davis や Attwater との homosocial な関係について論じた Guy Davidson の研究などがある。*ET* については、序論でも述べたが、作家最後の作品であることに加え、複雑な心理描写やリアリズムをもって、通俗的ロマンス作家という従来の見方ではなく、リアリズム作家、ひいてはモダニズム作家であったとして再評価する際の根拠とみなされる場合が多い。

4.　*CI* と *ET* の比較

Jolly も指摘するように、*ET* では *CI* の様々な要素がネガティヴに反転される。例えば、陽気な三少年は堕落した三人の成人男性となり、南海の楽園は感染症が蔓延するディストピアに、野蛮さや残忍さは海賊（白い野蛮）や「人食い人種」（黒い野蛮）の特性ではなく、むしろ、主人公たち三人の性質として描かれ（保険金詐欺や真珠の強奪を目論むなど、彼ら自身が「海賊」と言える）、敬虔さや勤勉といった美徳は原住民の船員たちに付与される。さらに、*CI* 結末部に登場する宣教師は、*ET* では悪魔的な人物 Attwater へと変容する（Jolly, “*The Ebb-Tide*” 85）。

本論も、こうした登場人物比較については、Jolly の詳細な研究に基づく。ただ、Jolly の主張は、結局のところ、Stevenson 自身による、実体験に基づいて書いた自分の作品やエッセイこそが「本当の」南太平洋を描いている（*Letters* 161）、という主張を反復することになり、それに沿えば、当然、南太平洋に行ったこともないのに文献で得た知識にのみ基づいて書かれた *CI* は劣るという結論に至る。確かに、どちらが言語芸術とし

てより優れているか、といった議論になれば、当然 *ET* に軍配が上がるだろう。しかし、*CI* は Ballantyne の知識と想像力（と偏見）、つまり脈々と育まれてきた西洋の「南海の楽園」言説に基づいて書かれ、少年向け海洋冒険小説の始祖となったという歴史的側面において、依然として特異な作品だ。そして、Stevenson を始め、後の Golding のような作家らによる執拗な「書き換えし」も、「南海の楽園」言説の根強さの裏返しと言える。

とは言え、*CI* と *ET* を比較して、実はそれほど書き換えられていない要素が、というよりも寧ろ *CI* においても比較的ネガティヴに書かれていた点が一つあって、それが両作品の主人公 Ralph Rover と Robert Herrick 二人の性質である。特に、Jolly が、*ET* が「モダニスト小説的」であることの証とする Herrick の「主体の危機」や「宗教的懐疑」などの要素の萌芽は、実はすでに Ralph にかなり見いだせるのであるが、次はこの点について検証したい。

5. 「海賊」Ralph Rover

海賊と主人公たちの関係について、Jolly は“in *The Coral Island*, the protagonists and the pirates are enemies; in *The Ebb-Tide*, the protagonists *are* the pirates”（“*The Ebb-Tide*”83）と述べているが、実のところ、Ralph は海賊に拉致されてからしばらく彼らの仲間となっており、*TI* の Jim Hawkins と同じ程度には「海賊」である。そもそも *CI* の「白い野蛮」である海賊は、海軍や商人との区別が不明瞭である。例えばラルフをさらった海賊船は、“the appearance of a fast-sailing trader than a pirate”（180; ch. 22）と、商船と見分けがつかない。抵抗する Ralph に多少の暴力をふるったのち、船長は、海賊旗は便利なので使うこともあるが、自分たちは基本的に白檀商人であると主張する：

> ‘Boy, you are too bold. I admit that we treated you roughly, but that was because you made us lose time and gave us a good deal of trouble.

> As to the black flag, that is merely a joke that my fellows play off upon people sometimes in order to frighten them. It is their humour, and does no harm. I am nor pirate, boy, but a lawful trader – a rough one, I grant you, but one can't help that in these seas, where there are so many pirates on the water and such murderous blackguards on the land. I carry on a trade in sandal-wood with the Feejee Islands; and if you chose, Ralph, to behave yourself and be a good boy, I'll take you along with me and give you a good share of your profits. . . . What say you, Ralph, would you like to become a sandal-wood trader?'（186; ch. 22）

船は海軍のように整然と管理され、四十人近くいる乗組員には“strict discipline”（180; ch. 22）が行き届き、海図や船を操る知識に長ける船長は（185; ch. 22）、キャプテンクックの航海記を愛読する（240; ch. 28）。さらに、必要に応じて海賊旗のみならず英国旗も使い分け（191; ch. 23）、宣教師の一団に対しては、たとえ牧師が原住民の改宗者であっても、原住民との橋渡しとして便利な存在であるため丁重に扱う（191-8; ch. 23）。もちろん、有事には、通常は隠している大砲や武器がすぐに配備できるようになっており（192; ch. 23）、利益のためには残忍な武力行使も厭わないのだが（207; ch. 23, 223; ch. 26）、彼らは一概に海賊とも、商人とも言い難い存在である。Ballantyne の物語が様々な文献に基づいて書かれていることからも、南海で商売する商人は、荒っぽい海賊まがいの行為を行っているという認識が、真偽の程はともかく、当時の一般読者に共有されていたのは事実だろう。

一方で、そもそも、Ralph は初めから船乗りと海賊との境にある。Ralph は物語の冒頭部で自分の出自を詳しく説明する：

> Roving has always been, and still is, my ruling passion, the joy of my heart, the very sunshine of my existence. In childhood, in boyhood, and

in man's estate, I have been a rover . . . .

. . . . My father was a sea-captain; my grandfather was a sea-captain; my great-grandfather had been a marine. Nobody could tell positively what occupation *his* father had followed; but my dear mother used to assert that he had been a midshipman, whose grandfather, on the mother's side, had been an admiral in the Royal Navy. . . . Indeed this was the case on both sides of the house; for my mother always went to sea with my father on his long voyages, and so spent the greater part of her life upon the water.

Thus it was, I suppose, that I came to inherit a roving disposition.（1; ch. 1）

Ralph によると、父方の祖先は大体が船乗りや船長、海軍の出身で、母親も父の航海にずっと同行していたことになっている（女性が夫や恋人の航海に同行していたというこの不自然な一節が、どの程度当時は一般的であったのかはさておき、これにより、父親のモラルは、特に性的には逸脱していないと示唆される）。しかし、イギリス史において初期の海軍とは、国王のお墨付きを得た海賊・私掠船であり、また商人が扱った「商品」にはアフリカ大陸からの奴隷が含まれたことを考えても、船乗り・海賊・商人を明確に分けるものはない。つまり、「彼の父親が何の職についていたのか誰も正確には分からなかった」との記述は、そうした含みを持たせてあるという憶測も可能となる。さらに、彼の通り名“Rover”は、*OED* を調べるまでもなく、「放浪者」と「海賊」の両方の意味を持つが、それ以前に、“Ralph Rover”とは、Stevenson の祖父が作った Bell Rock 灯台ができる以前に、Inch Cape Rock に設置されていた鐘を破壊したという伝説の海賊の名前である（*PRBM* 23-4）。

こうした彼の出自と名前に込められた海賊との親近性に加えて、Ralph は実際に海賊と共に行動するなかで、“I began to find that such constant

exposure to scenes of blood was having a slight effect upon myself, and I shuddered when I came to think that I, too, was becoming callous”（219; ch. 25）と、次第に海賊流のやり方や考え方に染まっていく自分に嫌悪感を抱く。そして、海賊と原住民の血みどろの争いに震え上がって気絶し、生き残った海賊の Bloody Bill（後に、Ralph に看取られながら船上で死亡する）と共に島を脱出する。物語中では、海賊は全て原住民に皆殺しにされ、また原住民側にも多くの犠牲が出るなど、双方が壊滅的なダメージを負うが、両者の間を揺れ動く Ralph という物語上の「駒」によって、「悪」がはびこる南海へのキリスト教布教の必要性が説かれる形となっている。この後のエピソードでも、繰り返し未開の人食い人種の残忍さと脅威が描かれるが、最終的には白人宣教師が登場して全ての問題を魔法のように解決し、そこに至るまでの Ralph の苦悩は全て無かったことにされてしまう。しかし、*CI* の続編 *GH* にまで視野を広げると、彼の苦悩は、一時的に保留にされていただけで、全く解消されていなかったことが明らかになる。

6.　*The Gorilla Hunters* における Ralph

CI の後半部において展開された Ralph の精神的な「揺れ動き」は、その六年後という設定の *GH* でより一層強調される。*GH* は商業的にはある程度の成功を収めているが、物語の構成は *CI* よりも散漫で、作品としての完成度は *CI* に劣る。しかし、Ralph の「不安」や「揺らぐ主体」といったネガティヴな要素はより顕著に見受けられ、そのことが基本的には楽しい冒険物語であるはずの作品構造を、散漫で支離滅裂なものにする。

物語は、22 歳になったばかりの Ralph の自宅に、他の二人が訪ねてくるところから始まる。若いころの美貌が影を潜め、しばしばゴリラのようだと形容される屈強な軍人 Jack、軍隊生活を経て銃の名手となり、さらにはインドの叔父の莫大な遺産を手に入れた Peterkin、そして少額の遺産を受け継いでアマチュア博物学者として暮らす Ralph の三人が再び結

集し、前者二人は当時発見されたばかりのゴリラを狩るために、Ralph は動植物の標本を採取するためアフリカへ行くことになる。途中、“a splendid hunter and a capital fellow”（75; ch. 5）である Makarooroo を通訳として従え、ゴリラ、象、ライオン、豹、食料用の小型の猿などを多数狩りながら、一行は Makarooroo の婚約者の救出、ポルトガル人奴隷商人が率いる原住民の一団との戦闘などを繰り広げる。終盤、Ralph は巨大なゴリラとの死闘で負傷し、生死の境をさまようが、なんとか Makarooroo をはじめとする「良い」原住民たちを海岸沿いの宣教師のいる街に送り届け、彼らがこの地域のキリスト教布教に大いに貢献するだろうとして、物語は締めくくられる。

三人の基本的な性格は *CI* と同じだが[5]、Ralph は前作にあった勇敢さが陰を潜め、見張り中に何度も眠りこけ（41; ch. 3）、銃の扱いも他の二人には遥かに劣り、“I came to learn how incompetent I was to command men in cases of emergency, for here my presence of mind utterly forsook me”（322; ch. 20）と、原住民を率いる指揮官としても使い物にならないなど、*ET* の Herrick のように無能さが強調される。

また、作中では、狩りや標本のためだけでなく、食料として多くの動物を狩るのであるが、特に猿を食べるグロテスクな場面が度々描かれる（42-3; ch. 3）。猿は肉としては旨いが、焼いた姿が人の赤子のようであり、それでも貴重な食料であるからと、主人公らは嫌々食べ続け、このカニバリズムと紙一重の行為に Ralph の心は病んでいく。後半になると、元来の目的である標本採取のための狩りにも嫌悪感を抱くようになり、スポーツとして狩りを楽しむ Peterkin と頻繁に対立するようになる：

> “. . . . Well, I’m quite certain that the young man-gorilla beside her, who ran off and escaped, was her son, and that he went home straightway and died of grief. That makes thirty-nine. Then−”
>
> “Oh, do be quiet, Peterkin, please,” said I, with a shudder. “You put

things in such a fearfully dark and murderous light that I feel quite as if I were a murderer. I feel quite uneasy, I assure you; and if it were not that we have killed all these creatures in the cause of science, I should be perfectly miserable.”

“In the cause of science!” repeated Peterkin; “humph! I suspect that a good deal of wickedness is perpetrated under the wing of science.” (257-8; ch. 16)

しかし、Ralph の、「科学の進歩」という大義名分でもっても自らの内で正当化することのできない動物殺し・猿殺しへの嫌悪、言い換えると自らが野蛮人に「落ちる」ことへの恐怖は、物語の後半部（ch. 14）で唐突に差し込まれたポルトガル人奴隷商人との戦いというプロットにかき消され[6]、最終的には一行がキリスト教圏の海岸沿いにたどり着くことで、何事もなかったかのように物語が終わる。この構図は、*CI* 結末部と全く同じである。

また、先述のように、理性と野蛮の間を揺れ動く Ralph には、“rover（放浪者）”というあだ名に加えて、*GH* ではさらに、“ebb-tide（引き潮）”のイメージも付与される：

“Besides,” I continued, “our success in battling with the evil tendencies of our natures depends often very much on the manner in which we make the attack. I have pondered this subject deeply, and have come to the conclusion that there is a certain moment in the awaking hour of each day which if seized and improved gains for us the victory. You know Shakespeare’s judicious remark – ‘There is a tide in the affairs of men which, taken at the flood, leads on to fortune.’ or something to that effect.（139; ch. 8）

これは、夜の見張りの番のときに、どうしても眠りこけてしまう Ralph が、そうした悪癖を改めることの難しさについて、*The Tragedy of Julius*

Caesar からの一節を例に挙げながら Peterkin と話をする場面で、作中で特に重要な場面という分けではない。しかし、後述のように、これと同じ引用が *ET* のテクスト中でも用いられ、さらにはタイトル頁に引用されていることからも、Stevenson の *ET* は、プロット的には *CI* に依拠しつつも、Robert Herrick という道徳的に揺れ動くキャラクターのモチーフはむしろ、より無能で道徳的葛藤に苦しむ、大人の Ralph にあると推測できる。

7. 「漂う」Robert Herrick

以上、*CI* と *GH* の悩み多き優柔不断な語り手 Ralph を確認したところで、その Stevenson による世紀末版である Herrick を見ていきたい。Herrick は *GH* の Ralph と同じく、何事にも無気力で根気が続かず、男らしさにかけ、無能であると自己評価を下している (5; ch. 1)。オックスフォードでも一つの学問に打ち込むことなく、そのうち運悪く父親が破産する。その後、職を転々としながら、"from place to place and from town to town, he carried the character of one thoroughly incompetent" (5; ch. 1) と、ニューヨークからサンフランシスコを経て、タヒチのパペーテに流れつき、"he had proved himself incapable of rising, and he now learned by experience that he could not stoop to fall. . . . but he looked on upon his own misfortune with a growing rage, and sometimes wondered at his patience" (7; ch. 1) と、自らの不幸と、堕落から這い上がることのできない自分の無力さに憤りを感じている。また、*GH* で見張り中に眠りこけていた Ralph のように、Herrick も物思いにふけって航海中に"dead reckoning（推定航法）" の義務を怠る場面が描かれる (44; ch. 5)。さらに、Davis と Huish、Attwater の両方から他方の殺害計画を持ち掛けられ、どちらに味方するかを決断できず、上述の *GH* でも出てきた *Julius Caesar* からの一節を用いながら、"[h]e had complied with the ebb-tide in man's affairs, and the tide

had carried him away; he heard already the roaring of the maelstrom that must hurry him under. And his bedevilled and dishonoured soul there was no thought of self. . . .”（88; ch. 8）と、自身の優柔不断に苦悩する。

こうした「揺れ動く」主体としての Herrick を最も象徴的に描くのが、消極的な入水自殺を試みるも、比喩的にではなく実際に潮流に押し流されて、岸辺に流れ着く場面である：

> A strong current set against him like a wind in his face: he contended with it heavily, wearily, without enthusiasm, but with substantial advantage; marking his progress the while, without pleasure, by the outline of the trees. Once he had a moment of hope. He heard to the southward of him, towards the centre of the lagoon, the wallowing of some great fish, doubtless a shark, and paused for a little, treading water. Might not this be the hangman? he thought. But the wallowing died away; mere silence succeeded; and Herrick pushed on again for the shore, raging as he went at his own strange nature. Ay, he would wait for the shark; but if he had heard him coming ... ! His smile was tragic. He could have spat upon himself.（108; ch. 10）

ただし、*CI* や *GH* で Ralph の苦悩が最終的にキリスト教信仰によって解決はしないまでも覆い隠され、一応は「救済」されたのに対して、Herrick は Attwater の勧誘を最終的には拒み、「信仰を捨てたことによって悩み苦しむことは自分の責任であり、それから逃げるつもりはない」と宣言し、「救済」の可能性を自ら放棄する：

> ‘Attwater,’ he said, ‘you push me beyond bearing. What am I to do? I do not believe! It is living truth to you; to me, upon my conscience, only folklore. I do not believe there is any form of words under heaven, by which I can lift the burthen from my shoulders. I must stagger on to the end with the pack of my responsibility; I cannot shift it; do you sup-

pose I would not, if I thought I could? I cannot – cannot – cannot – and left that suffice.'(86; ch. 8)

これは、男性的でHerrickの保護者のような役割を担っていたDavisが、最終的にはAttwaterに降参し、愛娘の病死を始めとする数々の苦悩から逃れるために神に救いを求めて「真の改悛者」となるのとは対照的だ。つまり、何事にも消極的で、文字通り「流れ」に身を任せることしかできず、かといって全てを諦めて死ぬこともできない停滞状態にあるHerrickが、神（彼の言うところの「寓話が作り出す幻想」）への帰依を拒絶するというただ一点において初めて自らの意思を貫き、それゆえに、三人の中で唯一、Attwaterの島から逃れ得る可能性があるのである。

このように、RalphやHerrickのような、地理的に、そして精神的・道徳的に「揺れ動く」主体を物語の視点とする伝統は、言うまでもなく、BallantyneやStevensonと同郷のWalter Scottの'Waverley Novels'の伝統と言える（だから当然、Stevenson批評では、Scottを文学的な「祖父」、Ballantyneを「父」と想定するのであるが、この点については別の機会に考えたい）。そして、RalphとHerrickの決定的な違いは、両作家の南海での植民地経験の有無に加えて、長老派教会の長老であったBallantyneと、既に二十代で不可知論者となったStevensonとの違いとも言えるだろう。

8. 究極のImperial HeroとしてのAttwater

最後に、*ET*の第四の主人公であるAttwaterについて手短に考察する。Jollyの言うように、物語構造を比較した限りでは、Attwaterは*CI*や*GH*の終わりに登場する名も無い宣教師に相当する（"*The Ebb-Tide*" 81）。しかし、彼の"I have had a business, and a colony, and a mission of my own"(84, ch. 8）との言葉にあるように、Attwaterは宣教師でありながら商人であり、植民地経営者である。これについてJollyは、Attwater

を描くことで、よく言われるように、Stevenson が南海における宣教師批判を展開したかったのではないとしながら、次のように主張する：

> Yet, although the presentation of Attwater clearly throws into question the undeviating valorisation of the missionary cause in *The Coral Island*, *The Ebb-Tide* is not an anti-missionary text in the way that, say, Melville's *Typee* is. The character of Attwater does not represent an attack on missionary any more than the character of Davis represents an attack on sea-captain. Rather, Stevenson uses his gentleman-missionary, who is also a trade and a colonialist, and a pirate and a slaver, to attack imperialism generally.（84-5）

これに付け加えるなら、Attwater の立派な体躯と、たった一人で連行してきた住民を奴隷として調教・支配する統率力、百発百中の銃の腕前、そして敵対する人間を自らの影響力のもとに屈服させるカリスマ性と知性は、それぞれ *CI* や *GH* で Jack、Peterkin、Ralph らが分担して体現していた美徳と一致する。つまり、Attwater とは、南海物によくある ‘missionary hero’ の書き換えではなく、*CI* で少年読者たちに提示された帝国拡大を支える四つのモデル―「将軍」、「兵士」、「大臣（知識人）」、そして「宣教師」―すべての要素を兼ね備えた人物である。その、帝国の建設者として、あらゆる美徳を兼ね備える最高のジェントルマンであるはずの Attwater が極めて否定的に描かれる様子は、確かに Stevenson による植民地主義への、ひいては植民者である自らにも向けられた痛烈な自己批判であり、だからこそ、当時の批評家を困惑させたのだろう。

9.　まとめ

Ballantyne は、十八世紀以来の「地上の楽園」としての南太平洋の島々を舞台に、三人の少年たちにそれぞれ統率力・服従・勇敢さ・思慮深さ・勤勉さ・信仰心など、植民地を拡大・維持していく上で必要な美徳を分担

して体現させることで、幅広い階層の少年読者に彼らの将来のあるべき姿を提示し、「帝国の建設者」として精神的に教化することに成功した。また、究極的にはキリスト教がすべての迷いや矛盾を解消してしまうとはいえ、彼の作品の中にもまた、自己の内側に潜む野蛮への恐怖といった、楽観的なテクストの流れにあらがう要素が散在していた。

一方、Stevenson は *ET* において、南海では究極の「権力」として機能するキリスト教と帝国主義との共謀関係を描いた。「野蛮人」に「絶対的真理」への帰依を迫り、従う者には惜しみない助力と救済を与える *CI* や *GH* の宣教師像は、*ET* では Attwater という超人的な帝国主義者に変容する。二つの文化が衝突する植民地において、宗教をはじめ、一方の側の価値観の強制が容易に正当化されるべきでないということは、Stevenson 自身がサモアで日々身をもって体験していたことである。*GH* で Ralph が食料として、または科学の名のもとの猿殺しに感じた嫌悪感は、正義の名のもとに「他者」を支配・蹂躙することへの懐疑に容易に発展する。そうした不安と自己懐疑は、決して神の名のもとに棚上げにして良いものではなく、それに向き合うことからしか植民地における諸問題は解決しない、という Stevenson の思いが、結末部の Herrick の決意に込められているのではないだろうか。

注

本稿は、「*The Coral Island* と *The Ebb-Tide* に見る南海物の形成と変容」（日本英文学会関西支部第 7 回大会、2012 年 12 月 22 日）の口頭発表原稿をもとに大幅な加筆修正を施したものであり、科学研究費補助金「南太平洋英語文学の変遷：19 世紀半ばから現代まで」（若手研究(B)、課題番号：24720134、2012-2015 年度）の成果の一部である。

1. 少年時代の Stevenson と Ballantyne に関する数々の逸話については Quayle を参照（216-7、298-9）。Stevenson は 13 歳の頃に *CI* を模した“Creek Island or Adventures in the South Seas”という作品も書いている（Hiller 7-8）。Ballantyne も、Stevenson

の祖父が建設した Bell Rock 灯台を訪れた体験記を *Personal Reminiscences in Book Making*（以下、*PRBM*）に残している。

2. 少年による無人島での国家建設と運営というモチーフは、Ballantyne 晩年の *The Island Queen*（1885）でさらに推し進められ、Ralph に代わって Paulina という少女が真善美を体現する女王になり、子どもだけでなく、大人たちも統治する国家を作り上げる。これについては、筆者の 2012 年の論文、「R. M. Ballantyne の三部作における“womanliness”：*The Coral Island*, *The Gorilla Hunters*, *The Island Queen* 再考」で既に論じた。
3. *PRBM* では、*CI* を色々な文献を参考にしながら書いたこと、そして間違って、ココナッツをペンナイフで穴が開けられるような果実としてしまったことなどが明かされている（*PRBM* 16-7）。
4. 一般的に最も入手しやすい *ET* は Jolly が編集した Oxford 版の *South Sea Tales* に収録されているものであるが、これは Stevenson による最終的な校正を含んでいないことから、本稿での引用は、Peter Hinchcliffe と Catherine Kerrigan が編集した Edinburgh UP 版からのものである。
5. *CI* では最年少ゆえに、子どもらしい悪戯と陽気さが強調されていた Peterkin は、*GH* ではしばしばそれに狡猾さと残忍さが加味される。また“. . . Peterkin was no less delighted with the monkeys that chattered at as we passed along. I never saw a man laugh as he did that day. He almost became hysterical. . . .”（84）と、猿に異常に興味と執着を示す様子が繰り返し描かれる。なお、Peterkin の残忍さは、*CI* の豚殺しの場面（112-3; ch. 14）でその萌芽が見られる。
6. このポルトガル人奴隷商人は、三人が旅の初めにアフリカの西海岸で出会うポルトガル人商人、“a Portuguese trader, about to set off to the interior”（43; ch. 3）、と同じと考えられるので、物語の最初に一応は登場している。

Works Cited

Ballantyne, R. M. *The Coral Island*. 1857. London: Puffin, 1982.

———. *The Gorilla Hunters*. 1861. San Antonio: Vision Forum, 2007.

———. *The Island Queen*. 1885. Gloucestershire: Dodo Press, 2007.

———. *Personal Reminiscences in Book Making*. 1893. Charleston: BiblioBazza, 2007.

Brantlinger, Patrick and William B. Thesing. “Introduction.” *A Companion to The Victorian Novel*. Ed. Patrick Brantlinger and William B. Thesing. Malden: Blackwell, 2002. 1-7.

Colley. Ann C. *Robert Louis Stevenson and the Colonial Imagination*. Hampshire: Ashgate, 2004.

Davidson, Guy. “Homosocial Relations, Masculine Embodiment, and Imperialism in Stevenson’s *The Ebb-Tide*.” *English Literature in Transition 1880-1920* 47.2 (2004):

123-141.

Elleray, Michelle. “Little Builders: Coral Insects, Missionary Culture, and the Victorian Child.” *Victorian Literature and Culture* 39 (2011): 223-238.

Green, Martin. *The Robinson Crusoe Story*. University Park: The Pennsylvania State UP, 1990. 111-124.

Hannabuss, Stuart. “Moral Islands: A Study of Robert Michael Ballantyne, Writer for Children.” *Scottish Literary Journal* 22.2 (1995): 29-40.

Hiller, Robert Irwin. *The South Sea Fiction of Robert Louis Stevenson*. NY: Peter Lang, 1989.

Jolly, Roslyn Jolly. “*The Ebb-Tide* and *The Coral Island*.” *Scottish Studies Review* 7.2 (2006): 79-91.

———. *Robert Louis Stevenson in the Pacific: Travel, Empire, and the Author's Profession*. Surrey: Ashgate. 2009.

Maher, Susan Naramore. “Recasting Crusoe: Frederick Marryat, R. M. Ballantyne and the Boys'-Book Robinsonade.” *Children's Literature Association Quarterly* 13.4 (1988): 169-74.

Philips, Lawrence. *The South Pacific Narratives of Robert Louis Stevenson and Jack London*. London: Continuum, 2012.

Quayle, Eric. *Ballantyne the Brave: A Victorian Writer and his Family*. London: Rupert Hart-Davis, 1967.

Sandison, Alan. “Robert Louis Stevenson: A Modernist in the South Seas.” *Durham University Journal* 83 (1991): 45-51.

Smith, Vanessa. *Literary Culture and the Pacific: Nineteenth-Century Textual Encounters*. Cambridge: Cambridge UP, 1998.

Stevenson, Robert Louis. *The Letters of Robert Louis Stevenson*, vol. 7. Ed. Bradford A. Booth and Ernest Mehew. New Haven: Yale UP, 1995.

———. *Treasure Island*. 1883. Oxford: Oxford UP, 1985.

Stevenson, Robert Louis and Lloyd Osbourne. *The Ebb-Tide: A Trio and a Quartette*. 1894. Ed. Peter Hinchcliffe and Catherine Kerrigan. Edinburgh: Edinburgh UP, 1995.

———. “The Ebb-Tide: A Trio and Quartette.” *South Sea Tales*. Ed. Roslyn Jolly. Oxford: Oxford UP, 1996.

岩尾龍太郎『ロビンソン変形譚小史－物語の漂流』みすず書房、2000.

乙黒麻記子「R. M. Ballantyne の三部作における“womanliness”：*The Coral Island*, *The Gorilla Hunters*, *The Island Queen* 再考」.『日本大学理工学部一般教育教室彙報』第92号（2012）:13-23.

水間千恵『女になった海賊と大人にならないこどもたち―ロビンソン変形譚のゆくえ―』多摩川大学出版、2009.